慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	精神技術学の危機 : ソヴェート・ロシヤに於ける精神技術学に就いて
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.1833(327)- 1865(359)
JaLC DOI	10.14991/001.19321001-0327
Abstract	
Notes	慶應義塾創立七十五年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0327

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2. 〃　Der Streit um die Ursachen des Geburtenrückganges, Jahrb. f. Nationalök. u. Statistik, 119. Bd.
3. Mombert, P. Bevölkerungslehre, 1929
4. 〃　Bevölkerungsentwicklung u. Wirtschaftsgestaltung, 1932
5. Fürth, H. Das Bevölkerungsproblem in Deutschland, 1925
6. Wolf, J. Nahrungsspielraum u. Menschenzahl, 1917
7. 〃　Die neue Sexualmoral u. das Geburtenproblem unserer Tage, 1928
8. Kahn, E. Der internationale Geburtenstreik, 1930
9. Krafft, L. Bevölkerungsprobleme. 1917
10. Roesle, E. Der Geburtenrückgang. 1914
11. Müller, K. V. Arbeiterbewegung u. Bevölkerungsfrage, 1927
12. Monheim, M. Rationalisierung der Menschenvermehrung, 1928
13. Rabinowicz, L. Le Problème de la Population en France, 1929
14. Paon, M. L'Immigration en France, 1926

精神技術學の危機

——ソヴェート・ロシヤに於ける精神技術學に就いて——

藤林敬三

一

既に H. Herkner は彼の小冊子 Die Bedeutung der Arbeitsfreude in Theorie und Praxis der Volkswirtschaft, 1905 に於て、私經濟的見解を以つて勞働生産力の國民經濟的意義に答へんとすることは誤りであり、批判的經濟學の最も高尚なる任務は吾々をして私經濟學上の欺瞞的な見方と概念とから解放せしむるにありとなし、かくの如き立場から經濟學者に取つても現代の工場勞働の生理學的特に心理學的分析の問題が重要であることを示した。彼に依れば勞働は苦痛から成り、勞働の費用は心理學的には不快感の總計である。而して現代の産業の下に於ては勞働の苦痛は客觀的には疲勞、疾病及び死亡の現象として現はれ、主觀的には單調、機械に依る人間の奴隷化の裡に深化する。斯くて彼は勞働の苦痛を輕減し、反對に勞働の喜悦を增進し得んがために勞働に關する心理學的研究の必

要を說いた。其の後世界大戰の勃發に至る迄一時はドイツに於て社會政策學會を中心として此の方面の問題は多くの學者の注意を惹いたのである。(註一) 乍然、世界大戰を經て其の後今日に至る迄、歐米並に日本を含む諸資本主義國に於ける勞働に關する心理學的研究と其の實踐は、不幸にして皮肉にも、H. Herkner の意圖を充すべき多くの素因を持ち乍ら、然かも尙ほ彼の云ふ國民經濟的意義に於てゞはなく寧ろ私經濟的見地の下に養育せられて來たと云つて宜い。(註二) 此の理由は簡單である。即ち、資本主義的生産方法に於ては彼の意圖したるが如き研究方向の必要が感ぜられてゐないと云ふ點である。現代産業が其の實踐に於て要求する所は、如何にして其の勞働の諸條件が勞働の喜悅と苦痛に影響するか、如何にして勞働の苦痛が輕減せられ得るかの研究ではなくして、寧ろ如何にして勞働の强度を增進し得るか、即ち勞働者の能率を如何にして增進せしめ得るかの問題の解決である。而して斯くの如き資本家的要求に直接應じ得たものが、F. W. Taylor の科學的管理法であり、廣く勞働に關する應用心理學的諸研究を其の主たる內容とする今日の經濟心理學若しくは産業心理學、ドイツに於て一般に精神技術學 Psychotechnik と稱せらるゝものは此の能率問題の解決をより科學的に行ふと云ふ見地の下に發展し來つたものである。其れは H. Herkner に影響せられるよりは寧ろ米國に於ける實際の能率問題により多くの興味を有したる H. Münsterberg に依つて、正に世界大戰の直前にドイツと米國に於て、創說せられたるものであることは既に周知の事實に屬する。(註三)

精神技術學が應用心理學の一部門に屬すると云ふ事情から、其の研究者達が、常に何等かの具體的目的の實現に資せんと努力するのは當然であり、然かも他方彼等は今日尙ほ H. Münsterberg の口吻に從つて、應用心理學者は其の實現を期待する目的の正否を判斷し、或は自ら目的を設定することを許されない、此は哲學者の行ふ所であつて應用心理學者は單に彼に與へられたる目的を實現し得るためには如何なる科學的方途を撰ぶべきか、即ち目的に對する單に手段方法の科學的研究を行ふに過ぎぬ、と云ふ。(註四) かくて彼等が、理論的にも亦實踐的にも勞働能率の增進を以て彼等に與へられたる目的であると見做し、他方資本家的要求が其の研究を促進せしめた。かくの如くにし今日の精神技術學が時に科學の資本家的利用に墮するものであると觀れる。

資本主義諸國に於ける精神技術學の右の如き意義に對比して、ソヴェートに於ては其れが如何なる意義を有するか、而して其れが吾々に對して何を敎へるかを見るのが私の本論に於ける目的である。

註一　當時ドイツに於ける社會政策學者の此の方面に關する興味と研究とに就いては何れ再論する機會があるであらう。茲には單に二三の參考文獻を擧ぐるに止める。

M. Weber; Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik, 1924.

Schriften des Vereins für Sozialpolitik. 133-135. Bde., 1910-1912.

H. Herkner; Probleme der Arbeiterpsychologie, (Schr. d. v. f. Sozialpol. 138. Bd. 1912)

註二　勿論多くの應用心理學者は其の研究が國民經濟的にも亦社會政策的にも意義あるものであることを力說することを忘れては居ない。乍然、其れは經濟學に關する彼等の甚だしき無知を示してゐるか、或は高々彼等のブルジョア的觀念に過ぎない。彼等は F. W. Taylor 派の勞資協調論から多く出でゝはゐない、然かも尙ほ吾々は H. Münster-

berg の次ぎの如き言辭に接する。即ち彼は云ふ、「實驗的經濟心理學は、事實恐らく、過度の、勞働に是ける心的不滿足、心的萎縮、壓迫及び心氣沮喪を全然除去する目的を以て職業活動を個人の心的特性に適應せしむることを以て最高の任務とする。」と。(Psychologie und Wirtschaftsleben, S. 181.) 乍然、斯く云ふ彼自身は素より彼の後繼者達は經濟心理學の此の最高任務に從つて彼等の研究を方向付けては居ない。素より私はかく云ふことに依つて彼等の科學的研究の總ての業蹟を否定しやうとするものではない。吾々は既にブルジョアジーのための精神技術學ではなくプロレタリアートのための研究が尙ほ批判の餘地あるも兎も角ソヴェート以外の地に於て發芽しつゝあることを知つてゐる。此の點に就ては次ぎの書並に吾國に於ては倉敷の勞働科學研究所の存在を指摘することが出來やう。

Rationalisierung, Arbeitswissenschaft und Arbeiterschutz, hersg. von der Kammer für Arbeiter und Angestellte in Wien, 2. Aufl. 1928.

註三　H. Münsterberg, Psychologie und Wirtschaftsleben, I. Aufl. 1912.; Psychology and industrial Efficiency, 1913.

註四　此の點に就いては特に文献を指摘する必要を認めない。讀者は精神技術學の多くの著者に依つて此の點を敎へられるであらうから。

二

ソヴェートに於ける精神技術學の成立否な輸入はソヴェートの特殊經濟狀態に基因する。一九一七年の革命以後、戰時共產主義の時期を通じてロシヤは著しく生產不振の狀態に煩はされ、一九二一年には共產主義への過渡期の對策として新經濟政策の採用のよぎなきに至つたが、其の後漸次生產力は恢復せられると同時に、新社會建設の計畫的努力に依つて、特に最近の第一期五ケ年計畫に於ける特に工業化の擴大を通じて國內の生產力が著しく增進しつゝあること、並に此れに伴つて勞働條件の改善及び一般文化的施設の擴張に依つて勞働者の生活狀態が既にある點に於ては資本主義諸國の狀態に優るものあるに至つてゐる。吾々は此の生產力恢復の努力の裡に先づソヴェートに於ける精神技術學の成立を見る。

戰時共產主義の時代に於ける苦境に陷れるロシヤの經濟狀態は、人の知るが如く、レーニンをしてティラー・システム採用の必要を痛感せしめた。資本主義の下に發達し、最も露骨に勞働者搾取の方法と化した科學的管理法を以て、彼は尙ほロシヤの現狀を救ふためには取つて學ぶべき方法であると考へた。彼の此の見解は軈て新經濟政策中の一項目としてティラー・システム又は割增金制度の復活として認められた。而してソヴェートに於ける精神技術學は此のティラー・システムの採用と共に若しくは其の裡に發展の端緒を見出すと云つて宜い。(註五)

乍然、何人も直ちに氣付くであらう如く、ティラー・システムの如き本來の資本家的搾取方法が全然無批判的にソヴェートに輸入せられ得なかつた事は明かである。此の問題を述べることが重要であるが、其れに先つてソヴェートに於ける精神技術學の研究の機關を簡單に傳へて置くことが便宜であらう。

勞働に關して一般に科學的研究を行ふ諸研究所の重視する問題は種々であつて必ずしも統一せられてはゐないが、勿論應用心理學的諸研究は此等の研究所內にあつて產業勞働の種々なる方面に渡つて、職業心理に關し、更らに又勞働者の敎育訓練並に作業心理の方面に就いて行はれてゐる。而してソヴェートに於ける此等の諸研究所は總て素より國家の管理に屬し、且つ他國の同種研究所とは異なり具體的な工場勞働を直接研究の對象となし得る狀態に置

かれてゐる。（註六）

F. Baumgarten 女史の報ずる所に從へば、ソヴェートに於ける勞働の科學的研究のための研究所は既に一九二一年には約二十ケ所あり、而してそれが一九二四年の初頭には六十ケ所に及んでゐる。（註七）又ソヴェートの最も著名なる精神技術學研究者である J. Spielrein 教授の傳ふる所に依れば、一九二七年には精神技術學の研究の實際に從事する施設は全數五十を超へて居り、其の内八實驗場は鐵道に關係し、其の他のものは諸種の人民委員會（即ち健康、教育及び勞働）並に科學的研究所に屬し、又一部は軍事の方面に關係してゐる。而して此等の實驗場に於て一九二七年一月以來十月に至る迄に實際的目的のために取扱はれたる被檢者總數は十萬人を超へて居り、その内一萬五千人余りの者は見習工であつた。（註八）私は不幸にして此等の諸研究所の現在の發展狀態を詳にし得ないが、現在では更らに著しく發展してゐるであらうと云ふ想像を否定すべき理由は存しない。即ち五ケ年計畫を通じて先づ期待せられたる生產力の增進のためには、從來資本主義諸國に發達した有ゆる手段特に其の科學的方法の採用がレーニンの精神に於て要求せられて居り、（註九）從つて吾々はかくの如き要求と努力の下に於て勞働に關する一般科學的研究が益〻擴大深化せられて行くことを期待していゝ。

一般に勞働の科學的研究と其の應用とのための是等の研究所並に實驗場の施設の外に、吾々はソヴェート内に於ける諸學會の存在を看過する譯には行かぬ。

既に一九二一年一月下旬 L. Trotzkij の發意に從つて、「第一回全露科學的勞働組織及び經營管理促進會議」が成立し、其れは本來鐵道運輸事業の有ゆる方面に渡つてティラーの管理法と合理化の實現を期待した。乍然、此の學會はロシヤに於ける此種のものゝ最初のものであつたが故に、問題の範圍は擴張せられ種々の方面から科學的勞働組織に關する一切の問題が取扱はれた。而して本學會の綱領に依れば、科學的勞働組織の一般的問題の中に精神技術學に關しては次ぎの如き問題が含まれてゐる。即ち

勞働組織の心的――肉體的問題。勞働保護。

（一）作業過程の心理學

（二）作業の心理――生理學的諸研究

（三）勞働保護

（四）作業の外部的諸條件の合理化

尙ほ本學會への參加者四百名、報告者八十一名に達した。（註一〇）此の事實はソヴェートの當時の狀態に對照して科學的勞働組織の問題、一般的には生產力增進のための科學的研究が如何に多數者の眞面目なる興味を惹いたかを示して居る。而して本會議の終末に於て其の第二回會議が一九二四年三月中旬モスコーに開催せらるゝこととし、其の決定せられたる綱領の六項目中に次ぎの二項目を含んでゐる。

第四、作業の心理――生理學

第五、勞働力の準備（職業的訓育、管理者養成、職業的選拔の諸方法）（註一一）。

其の後一九二七年五月二十九日―六月三日に渡りモスコーに於て、第一回全露精神技術學會（作業心理及び職業的選拔に關する學會）が獨立に開催せられ、參加者一五〇名を超へ且報告數一一〇に及んだ。而して本學會は次ぎの五部に分たれてゐる。

第一部、理論及び方法論
第二部、職業圖誌
第三部、職業的選拔
第四部、疲勞、練習及び合理化
第五部、生理學

而して第二回學會は一九二九年レーニングラードに於て開會せられることを決定した。（註一二）

此の種學會の順調なる發展は又前記の諸研究所の發達と共に吾々の期待し得る所である。尙ほ茲に附言すべき事實は、昨一九三一年九月八日―十三日の間、モスコーに於て第七回國際精神技術學會が甚だ盛大に行はれたことである。本學會にはソヴェートの各地方から參加したるもの合計凡そ五百名、これに加ふるに其の他の歐米諸國から來れるもの約百三十名に達したと傳へられてゐる。而して各國の報告數は、ソヴェート二七、ドイツ一二、フランス九、ポーランド七、アメリカ四、英國三、スキス二、其他スペイン、ベルギー、オランダ、チェッコスロバキヤ及びオースタリーの各一である。（註一三）　此の學會を通じてソヴェートに於ける精神技術學の發達の現狀が世界に顯示せられると同時に、此の學會の齎せる最も興味あり且つ意義ある點は、從來の資本主義的精神技術學に對するソヴェート精神技術學の總攻擊である。而して此の點が私に取つては讀者と共に本論に於ける最大の興味である。

註五　ミュンステルベルクの一九一二年の著「心理學と經濟生活」は、其れがドイツで公刊せられたる直後ロシヤ語に飜譯せられたとの事であるが、事實ロシヤに於ける精神技術學の發達は大戰と革命の後である。

註六　F. Baumgarten; Arbeitswissenschaft und Psychotechnik in Russland, 1924, S. 58.

註七　P. Devinat; Scientific Management in Europe, 1927. p. 51.

註八　Baumgarten, S. 9.

註九　J. Spielrein; La Psychotechnique et la sélection professionnelle en U. R. S. S. (Comptes rendus de la IVme Conférence internationale de Psychotechnique, 1929. p. 644-5.

註一〇　G. Grinko; Der Fünfjahrplan der U. d. S. S. R., S. 200.（高山洋吉譯、五ヶ年計畫概論、二九六―七頁）

註一一　Baumgarten, S. 47-8.

註一二　Baumgarten, S. 57.

註一三　Comptesrendus de la IVme Conférence internationale de Psychotechnique, p. 645, 648, 651.

註一四　Th. Valentiner; VII Internationale Psychotechnische Konferenz in Moskau (Zeitschr. f. Angewandte Psychologie, Bd. 41, H. 1/3, 1932, S. 187-8.)

伺同教授には次ぎの紹介文あることを附言して置く。私は此れを見ることが出來なかつたのは甚だ遺憾である。Spielrein; Psychotechnik in der Sowjet-Union (Annalen der Betriebswirtschaft und Arbeitsforschung, 1930. IV. 3. S. 342-353)

三

私は以下に於てソヴェートに於ける Taylorismus の問題從つて又精神技術學の問題の發展を概觀しやう。（註一四）

(1) K. A. Gastew の見解と其れに對する批判。

彼は一九二〇年モスコーに創設せられたる中央勞働研究所所長として爾來今日に至る迄同研究所の發展を指導し來つた。本研究所は勞働並に管理の科學的組織の研究を行ふを以つて其の任務とする。（註一五）

ガスティーフの見解に從へばソヴェートの現狀に最も必要なるものは「組織」であり、組織を運用するためには管理と指導が必要である。これを勞働生産力の問題に就いて見れば勞働作業の指導管理である。而して此の作業の指導管理を有效に行はんがためには勞働者の行ふ作業活動の分析的研究が必要である。然かもかくの如き研究は先づ一切の作業活動に含まるゝ基本的要素に關して行はるべきものである。かくて彼の解する所に依れば、此の基本的要素は結局「打」と「壓」Schlag und Druck の二に歸着する。

「打」即ち打つと云ふ運動は速かにして且つ烈しい運動であつて加工せられる對象物の外部に行はれる。對之、「壓」即ち壓すると云ふ運動は穩かなる運動であつて常に加工對象物に觸れてゐる。而して一切の作業活動は此の兩者の何れかに分析せられる。其處で此の單純なる二基本運動に關して如何にすれば最も經濟的に「力」の支出を調節し得るかを研究することが重要であると同時に、勞働者が如何なる仕事に從事するかを問はず、先づ此の二基本運動に就いて訓練を行はしめることに依つて、各種の複雜なる具體的作業の能率增進の基礎を確保することが可能であると考へられた。又彼は一切の人間活動を嚴格なる規律に依つて統制することを理想としたるが故に、産業勞働に就いては豫め右述の基本的運動の訓練の後、宛かも軍隊的な規律の下に勞働者を指導管理することが物質的生産力の增大の途なりと見做した。

既に一九一八年にレーニンは時の必要に應じて正に次ぎの如く呼んでゐる。「ドイツ人に就いて學べ。ドイツ人は今や規律と組織と而して最新式の機械産業に基き、最も嚴格なる管理と統制に基く共同勞働の諸原理を體得してゐる。而して吾々に缺くる所は正にこれである。幾多の困難なる試煉に依つて勝利に滿てる頭初から輝かしき最後に到達せんがために吾々の偉大なる革命に缺けてゐたものは又正にこれである。」と。而して又ブハーリンをして時代は次ぎの如く呼ばしめてゐる。「吾々に必要なるものはマルクシズムとアメリカニズムとである。」（註一六）

革命直後のロシヤには從前の農業國からの不熟練勞働者の大衆があり、正に彼等に缺くる所は技術と訓練と教育であつた。ガスティーフが人間生活の機械化と其の軍隊的な管理法とに依つて世に必要なる人物を供給せんと努力したのは必ずしも意義なしとしない。宛かもフォード以前のティラーが運動並に時間研究に依つてシュミットをして一日四十七噸半の銑鐵を運搬せしめ得たことは、又ガスティーフ自身の理想とする所であつたらう。彼は云ふ、「若しティラーにして世に生れざりしとせば、彼は正に見出さるべきでありしならん」と。

ガスティーフの作業分析はティラーの運動並に時間研究に比して特異のものであるが、彼を以て Taylorismus の信奉者であるとするに異論はないであらう。

乍然、軈てガスティーフのかくの如き見解は種々なる方面の反對を買つた。

勞働の科學的研究を行ふ共産主義者の批評は凡そ次ぎの如くであつた。

ガスティーフの見解はティラーの見解を出でないものであつて、其れは勞働の機械化と自動化に依つて勞働者を搾取するに至るであらう。吾々は勞働の科學的組織の問題に於ては勞働力を餘剰價値の源泉ではなく、生産力增進の基本要因であり、勞働者を以つて勞働の主體であると見做さねばならぬ。勞働力の涸渴と勞働者の早期死亡に依る勞働の最大强度化と生産能率の最大增進ではなく、最大生産力を得んがためには物的費用並にエネルギー消費の最小度と、且つ又、勞働條件の最適至善とを期待せねばならぬ。かくて科學的勞働組織の範圍に於ける作業方法は、

一、マルクス理論、及び

二、具體的實驗的科學（主として工學と生物學）に基き、

三、現代經濟の具體的要求に依つて決定せられねばならぬ。

ガスティーフに對する批判者はかくて、其の純粹の形態に於ける Taylorismus を觀念論的に葬り去ることを必要と考へた。何んとなればそは生産並に勞働への專ら資本主義的接近の結果なるが故である。

此の思想闘爭に於ける批判の要點は次ぎの如くであつた。即ち、

一、作業をして打と壓と云ふが如き最も單純なる筋肉作用に歸することは生産上作業の相對的意義の正當なる評價を不可能にし、且つ技術の合理化並に生産の機械化を妨げる。

二、作業過程の研究に際して心理―生理學的方面の不充分なる考慮、健康問題の無視及びプロレタリアートの利益に對して生産の利益を非共産主義的に對立せしむること。

三、一切のものを生産の物神性の下に置き、又生命ある人間を、思考することなき鈍感な、何等の伎倆も多方面への發展も否定せられたる生産者と化するが如き勞働者訓練法。

かくの如き批判の要點はソヴェートに於ける一般に勞働の科學的研究、從つて又精神技術學の出發點と其の發展傾向の何れに行きべきかを示すものとして今日尙ほ重要であることは後に明かにするであらう。

(2) J. Ermanski の Taylor-System 批評――合理化原理。

戰爭と革命の後、經濟的再建の方途としてティラー・システムがソヴェートに輸入せられた。バウムガルテン女史の傳ふる所に從へば、當時著しく多數の文獻を通じてティラー・システムは殆んど無批判的にソヴェートに宣傳せられた。此の多數の無批判的な紹介文獻に對して、エルマンスキーは既に一九一八年にティラー・システムに關する批判的な著作を公刊した。而して既に周知の如く此の書は其の後ロシヤに於て四度版を重ね、一九二五年にはドイツ語に飜譯せられてゐる。(Wissenschaftli.he Betriebsorganisation und Taylor-System) 左に此の書を通して彼の見解を簡單に解說しやう。

エルマンスキーは科學的經營組織の基本的問題として勞働の生産性と强度の二概念を明白に區別する。（註一七）而して勞働の生産性は勞働に於て消耗せられるエネルギーの最小量を以て最大の結果を實現せんとするエネルギー

と結果の相對的關係に於て規定せられる。彼に從つて、今勞働に於て消耗せられるエネルギーをEとし、其の得られたる結果をRとすれば、$\frac{R}{E}=m$ は消耗せられたるエネルギーの合理的利用の係數であつて、吾々はmの數値を可及的大ならしむることに依つて勞働の生産性を增大せしめ得る。此のためには一方機械、道具及び原料と云ふが如き生産の物的手段を勞働者に對して適當に合理化すること、機械に對して勞働者を適當に配置すること及び多數勞働者の勞働力を適當に組合はすこと（分業並に協業）が重要であり、他方に於ては作業に適當なる勞働者を選擇し、又作業活動其れ自體を合理化することが必要である。而して此の勞働力と物的生産手段の適當なる組合せは組織に關する事柄であつて、從つて科學的經營組織の問題は右の勞働生産性の標準に從ふ合理的勞働組織の問題として解決せられる。

對之、勞働の强度は單に勞働に於いて消耗せられるエネルギーの量を增大する場合、即ち勞働者は作業中彼の筋肉と神經とを異常に緊張せしめ且つより大なる意志緊張に於いて働く場合に增大する。而して此の場合には勿論勞働の强度化は常に生産の增大を伴ふものではあるが、それは生産の結果に對する最小のエネルギー支出に於てゞはなく最大のエネルギー支出に於てゞある。即ち勞働の强度化の場合にはRは增大し得ても其れは必然Eの增大せしめられたる結果であるが故にmは正常なる狀態に於ける勞働生産性の規準たるmよりも小である。

勞働の强度化に依つて得られたる結果は、換言すれば一時的に勞働者のエネルギー消費を最大にすること、即ち生理的限界に迄勞働者を驅使することに依つて得られたる結果であつて、其れは勞働者に期待し得る最大量である。

對之、一定の勞働條件の下に於ける勞働生産性の基準に於て得られたる結果は最大量ではなくて最適量である。かくてエルマンスキーは最大量原則 Maximalprinzip と最適量原則 Optimalprinzip とを對立せしめ、勞働の强度化は前者に於て實現せられ勞働生産性の增大は後者に從つてのみ期待せられるとする。

エルマンスキーは勞働に於けるE消耗量の測定が勞働生理學の實驗的測定に依つて決定せられると云ふ點に於て彼の論旨を科學的に維持せんとするものである。此の點に就いては彼の著「合理化の理論と實際」にも稍ゝ詳細なる說明がある。讀者の一讀を期待して置く。

以上に於て私は簡單にエルマンスキーの基本的見解を解說したが、彼はかくの如き見解からティラー・システムを批判する。

彼のティラー批評に從ふと、ティラー・システムは肯定せらるべき點と否定せらるべき點とを有してゐる。即ちティラーの行へる組織並に道具の改善に關する限り其れは最適量原則に一致するものであるが、彼の勞働强度化の試みは正に否定せらるべきものである。而してティラーの勞働强度化の方法としてエルマンスキーの最も痛擊する所は經濟的方法としての賃銀支拂方法である。即ちティラーの差別賃銀率或はティラー・システムに於て一般に採用せられる割增金附賃銀支拂方法である。かくの如き賃銀支拂方法は勞働者を驅使して生産結果の最大量を實現せしむるにあり、此の事を實證せんがために彼はフランスの勞働生理學者 J. Amar の研究に從つて、ティラーの問題とした銑鐵運搬の勞働が如何に過大なるエネルギー消耗を來すかを論じてゐる。

更らにエルマンスキーはティラーの運動並に時間研究を批評して、其れが、平均的な勞働者に就いて行はれるのではなく第一級の勞働者に就いて行はれる結果、それに依つて決定せられたる課業は通常の勞働者には常に過大なる要求として現はれると做し、又時間研究に依つて決定せられたるティラーの云ふ休憩時間の如きも甚だしく不當なる計算たることを暴露する。

素より吾々は一時的には、例へば運動競技に於けるが如く、最大量原則に從つて活動する。乍然、此の場合には當然それに續いて相當の休息と營養とに依つて身體的活力を充分に恢復することが出來る。反之、勞働者が日々引續き勞働の强度化に堪へんと努力する場合には疲勞の蓄積となり、其の結果は時に疾病として現はれ一般的には勞働者の生存期間の短縮、勞働能力持續の短縮（即ち生産年齢の低下）となる。それは又他面に於ては一部勞働者の恆常的失業狀態を生ぜしめる。かくの如きティラー・システムは正に勞働力の合理的利用を目的とするものではなく正に其の虐使に至ると評するも憚らない。

最後にエルマンスキーは次ぎの如く評論する。結局勞働者は資本主義の下に於ては機械と同樣に手段視せられ、資本家の利益のためには單に勞働者が勞働に於て消耗するエネルギーの量如何は問題でなく、從つて單に勞働の結果の大小に重心を置く結果其處では當然最大量原則が支配する。反之、社會主義的社會に於ては勞働者は全社會組織の最高目的と視られ從つて最適量原則のみが妥當する。

以上の如きエルマンスキーの見解は精神技術學的考察と云ふよりは寧ろ單に勞働生理學の基礎に立つて居り、從つて未だ問題の全面的解決に欠くる所あるも、尙ほ吾々は彼の根本觀念には多く敎へらるゝ所あるは云ふ迄もない。更らに附言する迄もなくエルマンスキーの見解がマルクス理論の基礎に立つものなることは何人も容易に知り得る所である。

(3)　科學的勞働組織と Taylor-System

一九二一年一月下旬「第一回全露科學的勞働組織及び經營管理促進會議」に於て、I. Pawlow と共に反射學 Reflexologie で有名なる W. M. Bechterew 敎授は「勞働に於ける人間力の合理的利用に就いて」述べてゐる。彼の見解はソヴェートに於ける精神技術學の問題を述べてゐる點に吾々の興味をそゝる。彼は勞働に關する疲勞、作業運動、練習、營養と能率の關係、集團的社會的要素の能率に及す影響、勞働者の作業に關する興味關心の問題等の科學的研究を示したる後、彼の與へたるテーゼに從へば、

總ての人が勞働に從事する社會主義的社會に於ては勞働、經營に於ける科學的組織、其の生産力增進及び勞働諸條件の改善に關する研究が第一に行はれねばならぬ。而して社會主義國家に於ける科學的勞働組織の合理化の基礎として妥當する原則は、「最大勞働能率は最大の健康保護と人格の發展を阻害するが如き諸條件の排除に基く」となした。

尙ほ彼は其のテイゼ中次ぎの如き個々の問題を指摘した。即ち、工場内の照明並に衞生設備、工場の美化藝術化、仕事に關する知識、其の社會的意義の了解に基く勞働者の興味の喚起、勞働者の生活欲求の充足、心身の保健、敎

育訓練、機械道具の完成は勞働者の個性に出來る丈け適應せしむること等々。

尙ほエルマンスキーは本會議に於て Taylorismus の批評を試みてゐるが、彼の見解に就いては既に吾々の見たる所である。只だ附言すべきはエルマンスキーの所說を中心にティラー・システムの讃否兩論に關する論爭が、最後に本會議の決議事項として大體エルマンスキーの見解を支維したことである。即ち、

「ティラー並に彼の共同研究者の、經營管理手段の合理的利用のための科學的組織の諸方法の確立に於ける功績の評價に關して、本會議は科學的勞働組織と Taylorismus との同一ならざることを言明する。即ち後者は單に一部分科學的經營組織の諸原理と一致し、且つ又多くは勞働者のエネルギー消耗を考慮することなく勞働能率の過度の增進に導く非科學的諸要素を含んで居る」

一九二一年の新經濟政策の前後にソヴェートに輸入せられたティラー・システムは、マルクス理論に基き且つ科學的批判の下に置かれて、資本主義的新搾取形態たるその本來の姿は揚棄せられて此處に科學的勞働組織の問題と化した。第一回全露科學的勞働組織及び經營管理促進會議のティラー・システム否定の決議は甚だしく地味であるが、これに依つてティラーに對する理論鬪爭は一應淸算せられ、ソヴェート經濟の實踐の裡に科學的勞働組織の問題が將來發展すべき指標が大體示されたと云つていゝ。かくて勞働に關する一切の科學的研究は勞働人格の發展を終局の目標として、資本主義的合理化ではなく、社會主義的合理化方策として企圖せられる。云ふ迄もなく、ソヴェートに於ける精神技術學は勞働に關する科學的研究の一分野として又右の如き意義を獲得する。

註一四　以下の序述は大體バウムガルテン女史の前揭書に從つたので以下一々引用の煩を避ける。

註一五　G. Grinko に從ふと、中央勞働研究所は莫大な豫算の下に第一期五ヶ年計畫中に十萬人以上の熟練勞働者を養成する筈である。同研究所はソヴェートに於ける同種研究所中最も古く且つ最大なるものゝ一つであるが、其の教育方法に尙ほ批判すべき點ありとするも常にソヴェート經濟發達のために功獻しつゝあることは甚だ尊敬すべき點である。

Grinko; Der Fünfjahrplan, S. 217. 高山氏譯、一三二頁。

註一六　Baumgarten, S. 114.

註一七　エルマンスキーは彼の勞働生產性及び强度の二概念と其の勞働生理學的基礎付けに就いて、更らに次ぎの書に明瞭に說明してゐる。

J. Ermanski; Theorie und Praxis der Rationalisierung, 1928. 東城貝雄氏譯、合理化の理論と實際。

四

私は以上の序述に依つて一九二一年前後にソヴェートに移入せられたティラー・システムと其の裡に包接せられた精神技術學の意義に關するソヴェートの批判を見た。乍然、それは既に十年の過去の事實であり、且つ當時と現今の五ヶ年計畫に依つて成功を傳へられつゝある經濟狀態の間には著しき發展の相違のあることを思ひ合せば、ソヴェート精神技術學の現狀こそ吾々の興味の中心でなければならぬ。――私は其の間のソヴェート精神技術學の發達に就いて其の詳細を知り得ないが――幸ひ昨秋モスコーに開かれた第七回國際精神技術學會は此の吾々の興味に

答へて下れた。而して同學會が吾々に否世界に與へた問題の中心は、ソヴェート精神技術學と他の歐米諸國に於ける資本主義的精神技術學の相互批判、寧ろ前者の攻擊に對する後者の防禦に終つたと云つていゝ。

以下私は此の問題に觸れやうと思ふ。（註一八）

本學會の主宰者であるモスコーのシュピールライン教授は開會の辭中次ぎの如く述べてゐる。「精神技術學は單に科學的任務のみならず又常に社會的任務をも充す。ロシヤに於ては今日特に著しく此の社會的任務を遂行すべき狀態にある。」又モスコー市を代表してエフィノウは其の祝辭中に、「精神技術學は社會科學中最も重要なる一部門であつて、其の任務とする所は社會主義的勞働を組織し、勞働を正しく分配し且つ勞働諸條件を合理化するにある。」と述べてゐる。かくて本學會は開會と同時にソヴェート精神技術學が科學的であると同時に社會主義的であることが言明せられた。私はこれに對する特に獨佛の精神技術學者の反對的評批に入るに先つてシュピールライン自身の見解を概略此處に引用しやう。而してそれはソヴェート精神技術學の理論的基礎を明かにしてゐる。即ち彼に從へば、

先づ西歐諸國からロシヤに移入せられた精神技術學の特徴は次ぎの如くであつた。職業上必要なりと見なされた個々の性能の確定、即ち此等諸性能は實驗的に（テストに依つて）確定され、且つ數學的（統計的）處理法に依つて評價せられた。凡そかくの如き方法は一九二四年迄持續した。が爾後初めて此の方法に對する社會的批判が行はれた。先づ辯證法的思考に從つて性能の恒常性が疑はれた。資本家的精神技術學に取つては確かに恒常素質と生物學的諸要因の意義を擴大し、動的な社會學的諸要因を輕視することが必要である。對之、眞にプロレタリアートのための精神技術學は其の階級鬪爭の補助手段として全然反對の道をとる。其れは諸性能を確定しやうとはしない。又事實かくの如き諸性能は存しないからである。其れは職業活動に適應するに至る迄一般的な人間的素質を發展せしめやうとする。從つて其の主たる問題は一定の職業に對して人を選擇し、かくて彼を其の職業に固定せしめるのではなく、大なる範圍に渡つて職業の轉換が試みられる。かくて精神技術學は百科全書的な工業教育の問題に入る。勿論學校教育は各個人が合理化せられたる產業の何れにも從事し得るが如く彼の知識と能力とを種々なる職業に向つて發展せしむるために行はれねばならぬ。此の實際の結果は既に婦人が工場にあつて困難なる力仕事に從事し、更らに至る處男子と同樣に經營の管理に參加してゐる。之れを要するに、

一、職業自體は變化してより高度に發展する。此の場合緊張せる肉體力を必要とするが如き勞働は機械に依つて行はれる。而して勞働の機械化が增進すると共に、然らば熟練勞働者は如何にして維持せられるか。

二、機械化は種々の職業間の區別を益〻消滅し、其の結果は資本主義諸國に於ては當然不熟練勞働者を要求する。乍然、

三、ロシヤに於ては工業教育に基き、又種々なる生產過程並に其の經濟的政治的目的を充分了解してゐることに依つて、勞働者に取つては却つて其れは精神的水準の上昇となる。然かも尙ほ

四、勞働者に取つては本來の勞働以外に又經營管理への參加並に政治的生活への關與が義務として要求せられる。

五、精神技術學の任務はかくて勞働者人格の哺育發展にある。

シュピールラインの右の見解に基く學會の報告「精神技術學の理論」が講演せられた後引續き行はれた討論に於て、當然吾々の期待し得るが如く、資本主義諸國の精神技術學者は一樣に反對の見解を以てこれに對立した。特にジュネーブの Ed. Claparède とベルリンの W. Mœde は凡そ次ぎの如き見解を持した。

精神技術學は科學としては單に目的達成の手段を供するに過ぎず、吾々が何を爲すべきかを云ふものでない。シュピールラインは資本家的科學と非資本家的科學とを區別するけれどもこれは承認し得ない。科學は單に客觀的であるか然らざるかであり、精神技術學が客觀的科學たるためには政治から從つて又社會主義から離れて自由でなければならぬ。

私が既に本論の初めに指摘して置いたやうに右の見解はミュンステルベルク以來の精神技術學者の殆んど套常語である。これに對するソヴェート側特にシュピールラインの答ふる處に依ると、「精神技術學は單なる技術論としては宛も空中に樓閣を描くに等しい。一切の科學、天文學でさへも、社會から其の問題を受け取る。吾々はロシヤに於て社會主義的社會形態が吾々を指導してゐることを卒直に認めるにも拘らず、西歐諸國に於ては學者は指命が何處より來るかを曲飾せんと努めて居る。只社會主義のための精神技術學のみが眞に現實を探求し得る。かくの如き前提に進み得ない科學は結局懷疑論に陷らざるを得ない。」

吾々は右の如きソヴェート精神技術學を了解し得んがためには、ソヴェートの經濟狀態特に其の勞働者政策並に

勞働者の生活狀態の現狀に就いて知ることが必要である。乍然、この事は本來私の目的とする所ではなく、又既に今日は多くの文獻を通じて世に紹介せられてゐるが故に、此處では序述を出來る丈け簡單に止め度いと思ふ。

ソヴェート經濟は其の五ケ年計畫の努力を通じて著しき發展の速度を示してゐるが、それは單に諸資本主義先進國の生產力に追從し、且つこれを凌駕せんとするのみならず、新社會建設の基礎であり社會主義社會への確實なる歩みである。

何人も知る如く、戰前は農業國であり未だ資本主義的經驗を多く有せず、且つ莫大なる地域を領有するにも拘らず概して自然の恩惠に浴すること少なく、國民の文化の程度が他の歐洲諸國民に比して劣つてゐたロシヤが、戰爭と革命の破壞作用に依つて當面した最も困難なる事情は生產力の減退であつた。即ち熟練勞働者と資本主義的技術とがソヴェートには必要であつた。今日の五ケ年計畫の努力も亦此處にある。而して此の一切の努力は云ふ迄もなく社會主義的形態に於て現はれ、特に勞働者政策に就いて之れを觀れば資本家的意義に於ける搾取方法としての勞働生產力の增進ではなく、社會主義的勞働組織の問題として存してゐる。

青少年に對する一般教育の普及は素より、年長無學者に對する一般教育に對して多大の努力が拂はれてゐるが、特に工場に於ける技術家並に熟練勞働者の養成が當然重要視せられてゐる。而して此の職業的技術的教育を效果あらしめんがために、學校は工場の實際生產と密接に關聯せしめられて居り、上級の工業學校は主として勞働者に門戸を開いてゐる。而して現に傳へられる所に依ると、上級の工業學校に於ては生徒全數の殆んど三分の二は勞働者

であるか又勞働者の子弟である。

勞働條件に就いて云へば、賃銀の引上げと共に勞働時間の短縮、即ち七時間勞働と一週五日制の實現が努力せられてゐる。(原則としては翌一九三三年十月一日を以て有ゆる種類の經營を通じて一般に七時間勞働が實施せられる筈であるが、既に事實幾多の經營に於て其の實現を見てゐる。)更らに工場内に於ては特に勞働者の保護施設に多大の注意が拂はれ、この事は又左に述ぶるが如き勞働者生活上の一般施設と共に相俟つて勞働者の疾病及び工場内の勞働災害數の減少を來たさしめてゐる。勞働保護施設の問題は全國八十の研究所並に實驗場に於ける研究の對象とせられてゐる。勞働者保護施設と共に衛生設備、更らに社會保險制度並に勞働者住宅の建設改善、これ等の努力は共に勞働者の一般生活狀態の改良に導く。

婦人の生活に就いては又特異の努力が拂はれてゐる。即ち種々の補助的な社會施設に依つて彼等を從來の主婦としての家庭生活から解放して、勞働婦人として工場内に於いて男子同樣に其の材能を充分に發揮せしめるやうに努められてゐる。而して婦人に對して職業教育を施すことは勿論であるが、經驗の示す所に依れば、彼等は工場内にあつて有ゆる種類の勞働に於て決して男子勞働者に劣らない。更らに母たる婦人勞働者並に其の乳兒の保護に充分の注意が拂はれてゐることは云ふ迄もない。かくの如くにして婦人の生活樣式は社會主義的基礎に於て變革され、又一般に其の文化的狀態は改善せられつゝある。

是等の諸方策に加へて、ソヴェートに於ては勞働者は總て彼等の行ふ仕事が一經營内に於て、更らに全社會經濟内に於て如何なる役割を演ずるかを明瞭に了解して居り、又彼等の爲し得たる所が如何程の意義を持ち得たかを示される。この事は各人の教育に於て準備せられる許りでなく、有ゆる宣傳と告知の手段を通じて全社會經濟に關しては素より一經營一人の勞働者に至る迄の計畫と其の成績が次ぎ〳〵に傳へられる。昨年前記の學會に出席したH. Rupp（ベルリン大學）はこの事に就いて次ぎの如く印象を述べてゐる。即ち、此處に吾々は「目的がより明瞭に且つ限定せられてゐる程、吾々の意志力はより强く作用する。」と云ふ N. Ach の法則を想起する。と。

最後に重要なる事項は、ソヴェートに於ては勞働者は單に生産者たるに止らず、同時に又生産の組織者である。かくて彼等こそ初めて勞働者を奴隷化する權力である機械の支配から免れてゐる。而して彼等は自ら彼等の行ふ勞働を以つて自由なる勞働と見做し、機械、技術及び科學的勞働組織は彼等の勞働を容易にし、彼等の文化的物質的厚生を增進する手段なりと考へる。

要之、――カルボヴは云ふ――ソヴェートに於ては勞働はもはや單なる生存の手段ではなく生活上の欲求として現はれる。新社會は新しい人間を必要とする。彼等は社會主義社會の目的と勞働條件に應じ、同時に共産主義社會への發展過程に於いて重要な役割を演ずる。社會主義社會は多方面に發達せる人物を必要とする。かくてソヴェート精神技術學に課せられたる問題は(一)教育、社會主義建設のための幹部の育成、(二)勞働組織者、社會の要求に應じ、社會各員の興味と能力に應じて勞働者――彼等は當然社會主義建設者の幹部である――の配置の科學的決定、及び(三)學校、經營等々に於ける勞働諸條件の社會主義的合理化、之れである。而してソヴェート精神技術學は

職業記述に代つて各種部門の產業勞働者の統一的職業輪廓を作成しなければならぬ。此の職業輪廓の作成の基礎として勞働者人格の研究、即ち人格の發展、其の外界に對する關係等々の人格の全內容の研究が行はれねばならぬ。

以上私はソヴェート學者の云ふ所に從つて其の精神技術學の概要を示し得たつもりである。これ以上に附言することは默足であるかも知れないが、尙ほ私は一二の點を讀者に注意して置き度い。

ヴェート精神技術學は他の諸科學と同樣に――そしてそれは比較的新しい事實であるが――マルクス―レーソニン主義、從つて唯物辯證法に依つて再吟味せられた。その結果は勞働人格に關する素質の恆常性が否定せられ、これに對して人格の發展過程に於ける外界と其の社會的歷史的要因が重視せられ、又男子と女子の精神技術學的差異が否定せられ、而して是等の理論問題は著々實踐に於て科學的に基礎付けられて行くやうである。更らに是等の問題が教育、勞働の分配、特に勞働の轉換の問題として精神技術學の課題とされてゐる。

吾々の此處に重要視しなければならぬ點は、此のソヴェートの唯物辯證法的精神技術學が、理論を其の實踐に於て證明し、其處から又新しい問題を發展せしむると云ふ點に科學の客觀性が確保せられてゐることである。かくてシュピールラインをして次ぎの如く云はしめる。「吾々の社會秩序に於てのみ精神技術學の自由は保證せられてゐる。」又云ふ迄もなく一切の研究所並に實驗場は國家的援助の下に生產の實際と結び付いてこのことを可能ならしめてゐる。

これがソヴェート精神技術學の特色である。

註一八　既に學會の報告書（Septième Conférence Internationale de Psychotechnique, Moscou, 8.-13. IX. 1931. Moscou-Leningrad, Edition d'Etat de la Litérature Sociale-Economique, 1931）は公刊せられてゐるやうであるが、遺憾ながら其れは未だ私の手もとに來てゐないので、以下私の述べる所は止むを得ず左に掲ぐるドイツの三應用心理學雜誌に紹介せられた諸氏の學會報告文に從つた。尙ほ以下一々引用の箇所を註とするの煩を避けたことを附言して置く。

K. A. Tramm; Die 7. internationale psychotechnische Konferenz in Moskau (Industrielle Psychotechnik, 8. Jahrg. H. 9, 1931)

W. Eliasberg; Bericht über den VII. internationalen Kongress für Psychotechnik, (Psychotechnische Zeitschrift, 7. Jahrg. Nr. 1. 1932)

H. Rupp; Eindrücke über Psychotechnik in Russland. (ebenda.)

Th. Valentiner; VII. Internationale Psychotechnische Konferenz in Moskau. (Zeitschr. f. Angewandte Psychologie, Bd. 41, H. 1/3. 1932)

五

素よりソヴェート精神技術學に就いては述ぶべき點は多々ある。特に其の現狀に關しては、個々の問題に關する吟味を必要とするであらう。乍然、吾々は今彼等の詳細なる實驗結果の報告に接してはゐない、從つて此處で此等の個々の問題に觸れることを差控へなければならぬし、又それは本來私が本論に於て問題としやうとする所ではない。更らに W. Eliasberg に從へば「シュピールライン及び彼の共同研究者の多くの者に依つて報告せられたもの

は、現時のロシヤに於ては凡そ一九二四年以後に、然かも其の純粋の形態に於ては漸く一九三〇年後に重視せられるに至つた見解である。」（註一九）即ち、前述の如くソヴェートに於ける今日の唯物辯證法的精神技術學は至極最近に支配的見解となつたと見ていゝ。例へば、一九二七年十月中旬パリに開催せられた第四回會國際精神技術學會に於けるシュピールラインの報告を見れば、彼自身並に全ソヴェート精神技術學會を通じて、尚ほ當時は彼等の今日資本家的精神技術學と稱する、ものゝ理論が其のまゝ採用せられてゐたと見ていゝ。（註二〇）從つて吾々は最近のソヴェートに於て精神技術學がマルクス理論に基いて急回轉をしつゝある、即ち其の資本家的形態を止揚して新展望を見つめつゝあると云つていゝ。此の意味に於て私は又個々の問題に關する彼等の業績を今後に期待しつゝ本論の問題に歸らう。

ソヴェート學者の攻擊に會して資本主義諸國の精神技術學者は科學の階級性を否定して尚ほ次ぎの如く主張する。

「精神技術學は人類のために役立つ」（メェーデ）「總ての精神技術學者に共通の目的」は「個人並に彼の屬する社會の福祉を目的として又其のために心理的諸法則の研究と人間の認識」とにある。（バレンチナー）（註二一）。

然らば何故にソヴェート學者は他國の精神技術學のかくの如き高尚なる任務を否定し、又何如にして資本主義諸國の學者がこれを高言するか。私は讀者と共に此の點を靜かに考へて見たいと思ふ。

精神技術學の主たる內容は人間の生產勞働に關する應用心理學的諸研究からなる。而して此の方面の問題は大體三つに分れてゐる。第一は各種職業への勞働の分配、第二は作業準備即ち作業教育、職業的訓練、廣くは職業教育、最後に第三には作業の合理化である。而して私見を以てすれば、此等の問題は各個に獨立のものではなくて、第一及び第二の問題は特に資本主義諸國に於ては第三の問題に係つて居り、云はゞ其の先決問題をなしてゐる。（此の問題に關する詳細の議論は私は又別に論じて見たいと思つてゐる。）從つて精神技術學の中心問題は結局作業の合理化に存する。其處で問題としての勞働者の作業の合理化は資本主義諸國に於ては何を意味するかを見なければならぬ。（註二二）企業は資本家の所有に屬して居り、一切の生產手段と共に生產物は資本家の所有であり、彼等は單に社會に必要なる生產物を供給せんがために或は自らの消費のために生產過程に資本を投ずるものではなくして、利潤の獲得のために資本を投下する。そして利潤の大小のみが資本家の關する所であり、此の目的のためには企業の收益性を大ならしめることが必要である。更らに此のためには生產物の原價を引下げることが必要である。而して生產物原價の引下げは企業の生產力の增大に依つて條件付けられてゐる。企業の合理化は技術的には物的生產手段と人的要因の合理化を通じて生產力の增進に貢獻する。前資本主義時代以來、年代的には十九世紀全體を通じて資本家のこの目的のために役立つたものは物的生產手段の改良即ち機械の發明改良である。然るに自由競爭の下に資本家の右の如き物的技術の改良に依る利潤增大の機會が漸次縮少せられるに從つて初めて問題にせられたのが人的要因の合理化であつた。而して幸ひにも其處には心理學が既に實驗心理學として成立して居り、且つ前世紀の終りには既に應用への準備が行はれつゝあつた。（註二三）精神技術學の成立は既に述べたるが如く其の後間もないことである。而して其の創設者ミュンステルベルクの著書「心理學と產業能率」（一九一三年）の表題に示された如く、正に

精神技術學は率直に勞働能率の增大を問題にした。資本家は勞働者を、前者が賃銀を支拂ひ後者が勞働力を提供すると云ふ關係に於て、雇ひ入れる。何人を雇ひ入れやうともそれは資本家の自由である。從つて能率の高い勞働者を採用し、且つ一度採用した勞働者の能率を高めることが資本家の利益である。從來精神技術學は專らかくの如き意味に於て資本家の庇護の下に發達して來た。精神技術學は自ら目的を設定し又其の價値判斷を下すことを許されない。其れは單に外部から、かくて資本家から與へられたる目的に對して忠實に其の達成の途を科學的に探求する。而してかくの如き意味に於てのみ、即ち資本家に好都合なる實踐に於てのみ、從來精神技術學は應用科學の一部門としての面目を維持して來た。

資本家の利益に取つては勞働の苦痛も勞働の喜悅も問題ではない。勿論心理學的には苦痛と云ひ喜悅と云ふが如き概念は稍ゝ不明瞭ではあるが、精神技術學が直接これを問題とせず、又既に述べたるが如く社會政策學者ヘルクナーの見解さへ直接問題にせられなかつた理由の一半は此處にある。

實踐を主とする限り精神技術學は資本家の利益に妥協しなければならぬ。たとへ精神技術學が勞働者のために科學的の研究を行ひ得るとしても、それは單なる研究に止まつて實踐に於てこれを證明することは不可能である。

資本主義諸國の精神技術學者はソヴェート學者の攻擊に會つて俄然或は「人類のために」と云ひ、或は「個人並に社會の福祉を目的とする」と辯ずるけれども、事實彼等の精神技術學書は明瞭にこのことを說いてゐない。シュピールラインが評して、彼等は其の學問の性質を「曲飾」すると云ふ所以である。精神技術學が勞働の應用心理學的研究を主題とする以上、個人の福祉を目的とするならば、それは當然第一に人間としての勞働者の福祉を目的としなければならぬ。換言すれば精神技術學は人としての勞働者を研究の對象とし、勞働者人格の發展のためにのみ科學的研究を行ふべきである。此處に應用科學としての價値ある目標が存在し、解決せらるべき個々の問題は此の目標に從つて明白に規定せられる。乍然、通常精神技術學と稱せられるものは右の如き明白な規定を受けてゐない許りでなく、其處に取扱はれたる問題は種々であつて全く無系統に羅列せられてゐるに過ぎない。然かも學者は此等の諸問題を系統化せんがために單に「經濟生活に對する心理學の應用」を以つて精神技術學なりと云ふか、或はミュンステルベルクに從つて「產業能率」增進の觀點に立つか、二者の何れかである。而して前者の云ふ所は單に後者の立場を曲飾したに過ぎない。リジンスキーは彼の著書に題して「經營心理學」と云ふが、（註二四）メェーデーの如く「人類のため」の精神技術學であると高言しない限り遙かに穩當である。

私は最後に今一つの批評を試みて結論に急ぎ度いと思ふ。

資本主義諸國に於て精神技術學者は彼等の研究が社會に價値ありと做す理由は事實彼等の經濟學的見解に基く。凡そ彼等の解する所に依れば、勞働能率の增進は資本家に有利であると同時に勞働者に取つても有利である。資本家に有利であることは既に述べたる所である。勞働能率の增進が勞働者に取つて有利なりと見做されるのは、賃銀の上昇と生產物の價格低下、即ち名目賃銀と共に實質賃銀の上昇である。乍然、吾々は此の際勞働能率の增進が資本家と勞働者に如何樣に有利に展開するかを見る必要がある。其のために吾々は直接勞働者の能率增進の刺戟とな

る割增金附賃銀支拂方法を例に取るのが便利である。ティラー自身は後に至つて彼の差別率賃銀が苛酷であることを認めては居るが、ハルゼー或はローワンの賞與附賃銀にしても、此等の賃銀形態が一見して如何に勞働能率の增進が勞働者に對するよりも資本家により有利であるかを示してゐる。かくの如くにして精神技術學者がティラーに從つて勞資協調論を呼ぶならば、彼等は勞働能率の增進が勞働者に僅かの利益を齎したことのみを高言して却つて資本家の側に立つものであると云はなければならぬ。而して勞働能率の增進の裏面に勞働者が通常如何に酷使せられてゐても、而してこの事が當然精神技術學の理論に於て勞働者人格の發展を阻害する事實であることが明瞭であつても、其の理論は直ちに實踐に於て證明し得られない。それは恐らく大學の研究室内の理論に止つて、具體的勞働の實踐に移され得ない、かくて此處に應用科學としての精神技術學の惱みがある。

以上の所說に從つて私は次ぎの如き結論に到達する。

（一）資本主義諸國に於ては精神技術學は資本家の庇護の下に資本家的實踐の裡にのみ問題を局限して、其の本來の問題に立ち歸り得ないか。或は

（二）大學の研究室内にあつて具體的に生產勞働者を研究の對象とすることなく、所謂實驗室内の理論の探求に止つて、應用科學としての其の本來の科學性から離れると同時に又其の本來の任務を放棄せざるを得ないか。或は

（三）其の本來の任務に忠實に、即ち勞働者人格の自由なる發展のための理論の探求に從事することに依つて却つて理論を實踐に於て證明するの困難に陷り、其れ自身の學問的發展を阻止するの已む無きに至るか。此の三途の何れかを選ばなければならぬ。

右の三途の何れに從ふも資本主義諸國に於ては精神技術學は社會秩序からの拘束に依つて全く學問の自由は保證されては居らぬ。資本主義諸國に於ては精神技術學の危機は正に此處にある。右の第一の方途を選ぶ資本主義的精神技術學は私の辯護し得ないものである。

註一九　Psychotechnische Zeitschrift, Jahrg. 7. Nr. 1. 1932, S. 20.

註二〇　Comptes rendus de la IVme Conférence internationale de Prychotechnique, 1929, p. 242-251; 644-651.

註二一　Industrielle Psychotechnik, 8. Jahrg. H. 9, 1931, S. 282.

Zeitschrift f. Angewandte Psychologie, Bd. 41, H. 1/3, 1932, S. 213.

註二二　合理化の問題に就いては、近く公刊せらるゝ「世界經濟問題講座」中に何れ最近私見を披瀝する機會があるから、讀者の一讀を希望する。

註二三　E. Kraepelin は彼の有名なる論文（Die Arbeitskurve, 1902）の骨子を既に約十年前に建設しつゝあつたと同時に其の實際的應用を企圖しつゝあつた。

E. Kraepelin; Übergeistige Arbeit, 2. Aufl, 1897.

Derselbe; Zur Überbürdungsfrage, 1897.

註二四　E. Lysinski; Psychologie des Betriebes, 1923.

（昭和七年九月二日稿）